

# 要 望 演 題

第 2 日 目 11月12日 (金)

## Y1-9

### 災害超急性期からの遺族支援～遺体安置所におけるDMORT活動から～

神戸赤十字病院 心療内科<sup>1)</sup>、神戸赤十字病院手術室<sup>2)</sup>、  
兵庫県災害医療センター<sup>3)</sup>

○村上 典子<sup>1)</sup>、島津 由美<sup>1)</sup>、横山 杏花<sup>2)</sup>、  
大庭 麻由子<sup>3)</sup>

演者は昨年度の第45回日本赤十字社医学会総会において「災害超急性期のこころのケア～遺族・遺体対応における課題～」を発表し、「災害における死」は遺族・救援者双方にとって大きなストレスとなるため、災害超急性期に遺族へのケアを行なうDMORT (Disaster Mortuary Operational Response Team: 災害時遺族・遺体対応チーム) の存在が重要であると述べた。このたび、災害訓練において実際にDMORTとして活動した経験について報告する。2005年のJR福知山線脱線事故の教訓をもとに、災害時の遺体対応や遺族へのグリーフケア、それらに関わる救援者のメンタルケアを目的に2006年に日本DMORT研究会(代表:兵庫医大・吉永和正教授)が発足し、演者は事務局長を務めている。この活動については全国の災害医療関係者の中で徐々に広まってきつつあるが、2009年11月30日の国民保護共同実動訓練(内閣官房・兵庫県・神戸市主催)において、DMAT (Disaster Medical Assistance Team) などの医療チームや消防、警察、自衛隊、海上保安庁などの組織と共に、公的な訓練としては本邦で初めて「DMORT」が参加することになった。訓練はテロでサリンが散布されたという想定で、DMORT(心療内科医、看護師によるチーム)は兵庫県警被害者支援室メンバーと共に遺族の遺体確認に立会い、その場でショックのあまり倒れこむ遺族のケアや、「ちゃんと治療してもらえたのか」「最期は苦しまなかったのか」などの遺族の疑問に答えるなどの活動を行った。DMORTが実際の災害現場で活動していくためには、まだまだ課題は山積みではあるが、今後も様々な訓練にDMORTとして参加することによって、災害超急性期からの遺族支援のシステムを構築していきたいと考えている。

## Y1-11

### ボランティアのためのこころのケア研修とその評価

諏訪赤十字病院 看護部<sup>1)</sup>、長野赤十字病院<sup>2)</sup>、  
川西赤十字病院<sup>3)</sup>、安曇野赤十字病院<sup>4)</sup>、  
下伊那赤十字病院<sup>5)</sup>、日本赤十字社長野県支部<sup>6)</sup>  
○五味 己寿枝<sup>1)</sup>、上條 幸弘<sup>1)</sup>、小平 孝子<sup>1)</sup>、  
大川原 憲司<sup>2)</sup>、野村 純子<sup>2)</sup>、今村 楓<sup>3)</sup>、  
高橋 郁美<sup>4)</sup>、稲原 功子<sup>4)</sup>、曾根 愛子<sup>5)</sup>、  
細江 久子<sup>5)</sup>、内村 辰徳<sup>6)</sup>

【はじめに】昨年度日本赤十字社長野県支部ではボランティアのためのこころのケア研修を実施した。その研修内容と評価を報告する。

【実践内容及び評価】H21年11月からH22年2月にかけて、県内5ヵ所において実施した研修には、赤十字救護隊員・柔道整復士会赤十字奉仕団員・赤十字情報奉仕団員・地域奉仕団員、計115名が参加した。研修は、日本赤十字社の防災ボランティアのためのこころのケア研修マニュアルに沿って実施し、2会場でロールプレイとグループワークを取り入れた。ロールプレイでは、初め戸惑っていた参加者も、徐々に慣れて自分なりに状況を設定して役割を体験していた。グループワークでは、参加者の表現に個人差はあったが、自分の経験や考えについて意見交換できていた。終了時のアンケートでは、ロールプレイやグループワークに9割の者が賛成であった。また、諏訪会場では参加者の理解を深めるために開始時に10問のプレテストを実施、終了時に同じ内容でポストテストを実施した。テストの結果、災害時のPTSDについて正解者がゼロであり、「適切な対処をしてもストレス下ではトラウマとなる」と認識していた。

【考察】プレ・ポストテストから、PTSDやトラウマについての認識にメディアの影響が大きいことが考えられた。ボランティアには、正しい医学的な知識のもと、「赤十字のこころのケア」についてわかりやすく説明する必要がある。そのため、時間的制約や参加者の不慣れはあるが、ロールプレイやグループワークを行い、参加者が自らの経験を資源に、主体的に学べる研修を実施することが重要である。

## Y1-10

### 第4ブロック災害救護訓練におけるこころのケア訓練報告

大津赤十字病院 看護部

○橋添 礼子、狩野 鶴代、増尾 佳苗

【目的】第4ブロックでのこころのケア指導者は60名以上となっている。しかし、ブロック内で交流する場がなく自己のスキルを向上させる機会もない。そこで、平成22年度第4ブロック災害救護訓練において、こころのケア指導者を対象とした「グリーフケア」「遺体修復訓練」「ロールプレイ」を取り入れた研修を実施した。また、実働訓練では「救護班に同行しての救護所活動」と「こころのケア班での避難所活動」を実施し、活動記録も実施した。訓練終了後のアンケート調査にて、こころのケア訓練の意義と課題が明確となったため報告する。

【訓練日程と調査方法】各々の訓練終了後アンケート調査

調査1: 4/25グリーフケア・遺体修復訓練・ロールプレイ研修: 参加者39名

調査2: 5/23実働訓練: 救護班に同行11名 こころのケア班6名

【結果】〈調査1〉回収率90% (35名) 救護班活動経験: なし15名あり20名こころのケア活動経験: なし23名あり12名研修に対しての感想: 遺体修復訓練を経験し方法の理解ができた。ロールプレイを重ねることでスキルアップにつながる。

〈調査2〉回収率100% (17名)

記録について: 記録の種類が多い。時間が無い。

訓練について: 指導者同士の連携がとれた。救護所や避難所の様子が理解でき、こころのケア活動のイメージがわいた。多数のケア対象者がおられると優先度の決定に迷う。

【結論】1. こころのケア指導者は、救護活動やこころのケア活動の経験が少なく、今回の研修は、指導者のスキル向上につながりフォローアップ研修になった。今後の研修継続への要望も多い  
2. 実働訓練では、災害時の活動と同様に救護所・避難所活動を実施したため、こころのケア活動のイメージ化につながった  
3. こころのケア活動の記録は、記録時間確保が難しく、個人記録票に記載すべき事例の判断が難しい

## Y1-12

### 当院での国際支援事業における派遣要員のメンタルサポートの試み

大阪赤十字病院 精神神経科臨床心理係<sup>1)</sup>、

大阪赤十字病院 国際医療救援部<sup>2)</sup>

○高瀬 みき<sup>1)</sup>、中出 雅治<sup>2)</sup>

【はじめに】当院は、2006年4月より、「国際医療救援拠点病院」に指定され、「国際医療救援部」が設置された。その後、海外派遣活動に出勤した職員は、帰国に合わせて、2007年2月に帰国後の「メンタルサポート事業」を開始した。その報告と今後の課題を考察する。

【目的】日本赤十字社の医療支援活動における心理的支援プログラムとして、こころのケア指導者による「こころのケア研修会(支部主催)」がある。被災者への心理的ケアを中心に行われているが、救援者へのケアも不可欠なものである。そこで、当院ではメンタルサポート事業を行うこととした。事業内容は、国際医療救援部の全派遣要員に対して、帰国後のメンタルヘルス・ケアおよびマネージメントを行うことであり、派遣要員のストレス軽減および職場復帰を円滑にすることが目的である。

【方法】通常勤務開始の数日前までには、第一回目の半構造化面接を実施している。事前記入してもらったアンケートを元に、精神面への負荷の程度およびストレス対処へのフィードバックなどを聴き取る。第二回目は、通常業務開始一カ月後の適応状態について、質問用紙を用いて、心身の状態を評価している。この結果は、本人宛の文書で報告されることになる。

【考察】これまで、のべ13名の面談およびストレス調査を行った。調査結果より、派遣要員には、疲労感に伴う身体症状や緊張・不眠といった共通のストレス症状が存在した。また、初回派遣要員に対するアフターケアの必要性も考えられる結果となった。その他、派遣要員のストレスとして考えられた結果について、報告したい。